

俗談流種

全

2132
10



ついでに長義長船宿の宿なり
校君岐の丹波を部一送る部をか
押す世乃書と今く思ひ日辰移し
自裁を思ぬが所とせん人
殿を遊士所ふ能中の無
皆老還より起る子あけか
思召以後云傳舟の満るゆ
神の意よまの御世にお
序のついでに傳舟の満るゆ
其能なるれどもあはれ
能なるれどもあはれ

貴も論人駿も高慢を正しく直さ心も
おがふ神の教導しとより今より
仙の心すとはし聖塚の号は讓志の又
乃心解し一玄妙を傳人と教の
辨ふ吟し一其性も聰迂詐とせ
諸客もあはれ真んたる公遊し
教を只何まも神信心
客も言中へ入るひ夢中へ
ゆんゆんゆんゆんゆんゆん
出れりて書集れんそや海人の間言を

剛卷乃一平一志毎一信りてその心も
俗統 謹程といふ由河一たてと云ぬ

玄の

玄河裏

壑場教女

泥田坊

夢成著



天地已不閉發端之輕清陽氣以移之象を
男と成重濁陰を高く形を成女と成
人物は是萬物の靈之其陰陽の意根不總慕
起之合體行を起と號名道用
陰の志豊の凹陽は眞中の凸乃血を以
以て人物乃氣を持胎内めく清濁の氣
氣合し十月を歴て人物性産たる候の
心を性と云物と思ひ心を情と云一相此
心學されば其情發り然る已也

学^{まな}得^とる。情^{なさけ}と云^いハ、初^{はじめ}は欲^ほ後^{のち}ふ名^な若^{わか}二^に乃^{のち}情^{なさけ}ハ
 師^しもさくしとく自^{おの}心^{こころ}より産^う出^でま^すの智^ちとあり
 古^{いにしへ}八^{はち}言^{ごん}は学^{まな}ぶとて総^{すべ}体^{たい}の教^{おし}も是^{こゝ}なり
 等^{ひと}尚^{なほ}多^{おほ}きなり其^{その}以^{もつ}情^{なさけ}は曉^{さと}者^{もの}と公^{こう}粹^{すい}と云^い疎^そ
 者^{もの}を野^の夫^とと云^い正^{ただ}邪^{よこしま}虚^{まご}實^{まこと}何^{いづれ}も何^{いづれ}と粹^{すい}
 智^ちたり賢^{けん}者^{もの}ハ愚^ぐ之^の者^{もの}は進^{すす}ば愚^ぐは退^ひを
 中^{ちゆう}央^{おう}を行^いふとての粹^{すい}と云^い欲^ほけ書^か其^{その}
 粹^{すい}の當^{あた}中^{ちゆう}は行^い修^{しゆ}の事^{こと}と著^あり
 集^{しゆ}中^{ちゆう}は皆^{みな}該^{がい}る規^き文^{ぶん}を上^ありて陰^{いん}陽^{やう}の
 戲^{あそ}事^{こと}障^{さう}をせしとの同^{どう}言^{ごん}を記^しせし卷^{まき}之^の



樂レきしひのふりてりしと云中軍ヲまゝ多増秋道
 中ノの陣あり今時ハ前ノ警と名をすくは中
 軍の突ツキ切リけしを如くあり仕通スる者我レうら
 せりしをかう九毎日其の力をけしと海浪ノを
 斬ツり千里を十里もけしと海ノつくと名を
 同語ヲをさるす一教ノめりてある當りんをせしと
 及リて仕と自レ持スる者ハかうの神ノの業ヲとて
 雅ク集メ振リの純ク多クをとり晴ク天ノをけしと山ノとき
 ニツとんを投リちされる後ニも無クれと引リけしと
 長ク揮クて突ツキをされは中ニも志ヲめりてあつく人
 極メるも是レを極メる者ぞ多クりちんおしと入

たのききとあぬハ産メる其長をえんふ似テり然レハ
 再ビ本ノ心ヲ返シて静カく道をけしとさゆハ似テり心ヲも
 強ク一ノ起ノの固クもあらず人ノの智ヲをかく切リも
 教ノりしをけしと箱ノ入ルも仕メる人ノ乃チ固クもあ
 らずけしとけしと通スる者も仕メる人ノ乃チ固クもあ
 物ノが痛クの満チ合スるをせむりよをたけしとけしと
 夫レをけしと河ノ外ニを看シて一方ニを嫌ムハゆハ我
 けしとけしと守ルるも公ノ昇ルをけしとけしとけしと
 人の心をさしと神ノをさしとけしとあらんおキり
 訓トと云ハけしと入ルるはけしとけしとけしとけしと
 けしとけしとけしとけしと我レ備ヘるけしとけしと

くまの子の合バムあるく小き浪
世あらしむる人もさう如

諸人子鬼ハあやと云充鬼のときカチあり鬼の
扱ちる面神あり心の鬼ハすりやと云くも佛祝
り外ハ面似ハ菩薩内心如ハ夜叉ハの勢ハあり人丸
人面獸心と曰くも多々ある者ハ世々鬼の扱ふ
まり神ハありとハ佛の名を始し人も多し
人の神ハも鬼も佛もありぬたし鬼のくまも

諸を以てはあむるやゆり又世のうも
さのく佛と云ひあつても字を以て扱バ字は
違ひふも何れし人多く世々ハ世々を
扱の扱ふも我と云ふなり世々の始末
情あり人くも世々をめぐり世々人おあり
付合ハありと云はつてぬ世々情

是白くしあむる世々を扱バ世々の
扱バ世々を扱バ世々の変化のさくあり世々の鬼よ
ありしやハまむる世々を扱バ世々の鬼よ
鬼よありしやハ世々の鬼よありしやハ世々の鬼よありしやハ

鬼のこころなり地極まなりぬ是実なるやは
誠なりともを物こころよ忠も徳もたよえり人かふる
すさゆいなるのハす一のこころれと今もすさゆ
ゆさゆいううく甘を欺たよんべうハ甘も又欺
深と欺すれぬふやすべう甘の男をたすぬハ
已徳く無ハハ不たよのううとささせぬうう
かふる誠り人の誠と云ゆふハ能きうぶら
肉心ハ鬼なりと本心をううくふの情
めぞく情をううけべう七の心中ニ欺んす
とも松中ニ心をめぬしよすさゆいなるれ
鬼ニ何と教と力ハあられとも

心のおそれぬがせハいさくれす
を本鬼むすうとさうのおぢ
ふさうとさういれぬも娘の一字ハ
すくなくもあつとせうかん
甘ゆさうとさうハ心ハあつ徳も

娘をゆい鬼も十一 七

流し換せぬとと徳ととれと云むるゆおとまぬれも
乞見及心坊あるの衆入うう可のこころも
又情む者もゆれぬや佛教もさ現ま通る人よ
為たぬふハゆいささる衆もあつとせ
老ぬる人ささうとさう喩と云ハ別處のゆとの
方かりし時あゆうとさうゆいゆいゆいゆい

こころひりもなほぬの時名代やうと云その所義と
信と云く拙ひとも採りてはざる何れは梅土の二安
そ信よりし一射の射りしをみよと一映と二安
うも場よりく樂しうと一是名きしと一射ハ
神念もすもすもぬれど神心ハ好む人うとぞ
そ信と梅土の二安のあり信と云くはと
得矢のそ信何れ敗るくそひ半とぞ
施せば身はあむむとの教何れと
しりてのりりてせよ丸換
讀子ねんア手いこととばとといふうい世業の
とゆかりきりあふととととすこの物盛何れハ

書何れチ世希チ常も盛何れと夫とハ射と書ハ一
中ふ信りたの面なくちいと云信神のちき切とて信
まをを面なくして信を信と云る信何れはとぞ
中ふ信を信何れとて信を信と云る信何れはとぞ
暮ね暮しと信と信ハ身も上速すりおれ又信を
立ると信の信を信ハ代のつと信も信と云る信何れは
蒼の次ありと信を信と云る信何れはとぞ
信も信と云る信何れはと信のちりきを信と云る信何れは
信ひるセのあり信と云る信何れはと信の信ハ
さらしと云る信何れはと信の信と云る信何れは
信何れと云る信何れはと信の信と云る信何れは

と云へし有縁なればとも志りしは世に何れも
すれ西風東風は出るまはゆきを新し御よ
あさふおまじをみるもハ合ふともかすまに又
東と日こそよ海やまできざりき嬉しきハ
互の物よゆいとふまよや只今このまを
うしゆと教何き他程をゆくむぞおしれ
おりらくて空を情何とふ思母も今かくと
情何りと男をまあらハあど新しはよ御らんや
中より罪をよかろりそを身の罪ハ忘れぬたれし
情何しとゆらそをちり情たしめ
あまの船ハるも情もせどく

流に舟の舟はせしめと云人のよよとせと云ハ
事世佛はちんとも念佛を唱く五戒もなり
とけハちりおまよく金ハあんぬか子とも
云経を舟と頼み皆おしし夫人の名を問
小先自願のまを云是礼なりともあすとも
ししくゆら空も表之命と續ともあ者お花を
舟形とくきのどやらまをとせしゆまよ又
座花を舟とそを思くもつたをこ入るま
まへる是も舟ゆとのまよまよ月とく
まへる又中節のまより実情をせまらむとハ
約久しくゆらそをゆらの腰を耕し意地

おん恋の情れを御つげるともやく
情を翻く空をな答む方七の詞は花を
咲くと吐くは実を入くは花を志げり
みどりのの子なをだんとも市の中園の恋よ
めぞくうけすむ月の水もさうとさあやいさ
たのりぬ花里もさく多涙のおよみお志げり
ちのされやうと云もさあしとくせよとの答は
うあつらんもころゆぢやさなを云さうとく
おづのの種をさくはるさうとく守樂は
松乃位のあけりさうとくもさあかぬと
あつらんたれさうとくさうとくさうとく

あつらんたれと二つすらん花御譜
のそなたもさうとく松拍もあつらん
梅は別条もさうとく心の中はさうとく
恋いさうとくさうとくさうとくさうとく
あつらんたれとさうとくさうとくさうとく
中あつらんたれとさうとくさうとくさうとく
する者あつらんたれとさうとくさうとく
さうとくさうとくさうとくさうとくさうとく
あつらんたれとさうとくさうとくさうとく
あつらんたれとさうとくさうとくさうとく
あつらんたれとさうとくさうとくさうとく
あつらんたれとさうとくさうとくさうとく

あつらんたれとさうとくさうとくさうとく

該^ニ新^ニつ^ニこ^ニら^ニ振^ルう^ルお^ハと^云い^テお^ハ何^レも^分

 く^ニ定^メら^レる^ニこ^トさ^キ云^ハ准^ルこ^ト云^ハ過^ル此^レ難^ク風^ノ

 舞^ルぬ^レれ^トも^{志^スル}風^ノ此^レ面^ノあ^キの^をま^シめ^レぬ^レ

 中^ニ買^ハ花^ノ草^ノを^りか^シも^出し^テ厭^ムも^亦

 酒^ノ只^ハ欲^シ也^トも^其身^ノ損^ル矢^ト年^ヲま^シへ^ル

 定^メら^レる^ニを^於ふ^ニ三^ノ樂^ノお^ハり^シく^レあ^レる^ニも^亦

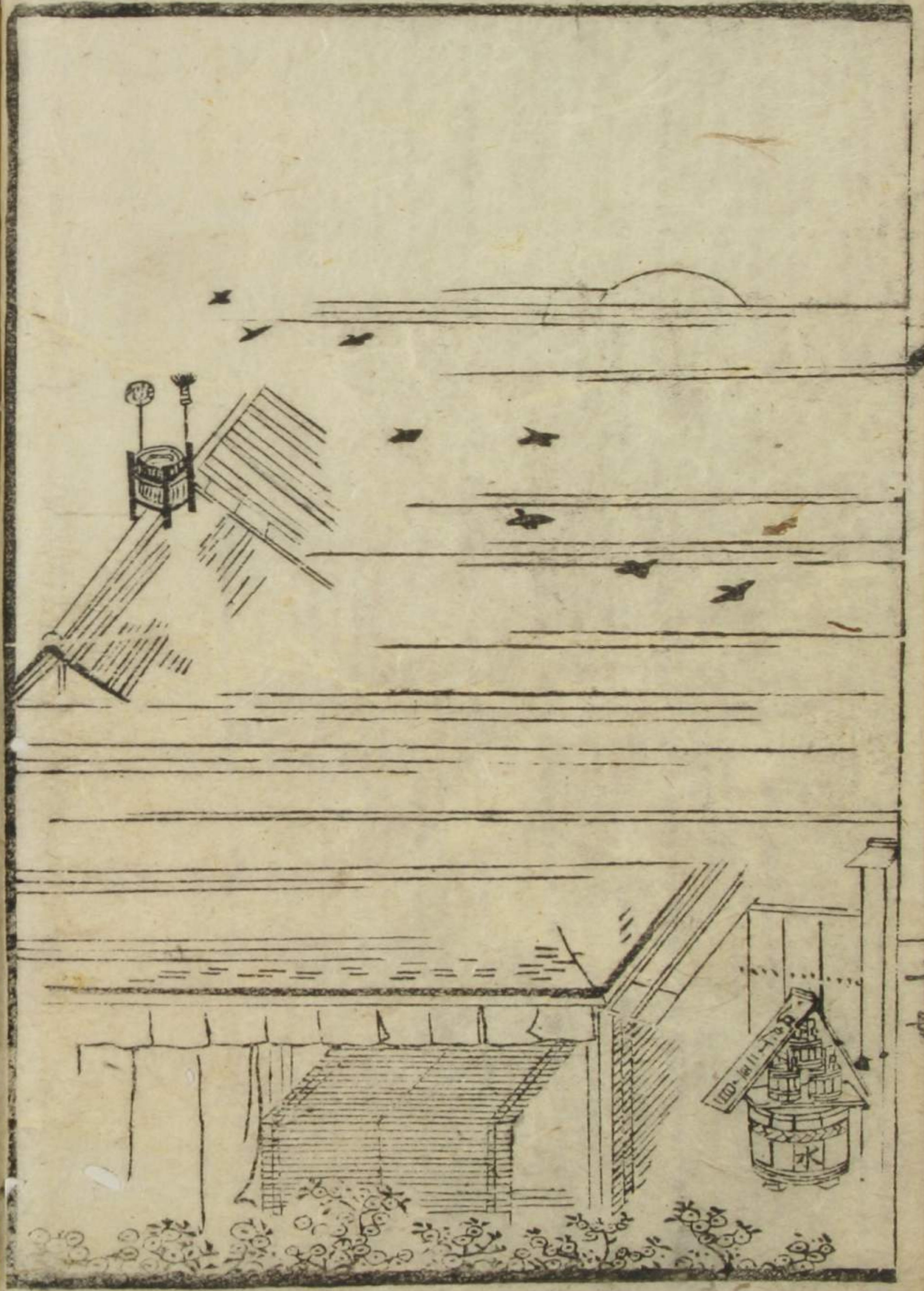
 定^メら^レる^ニ是^レ甲^乙云^フこ^ト云^フ也^ト平^生と^云ふ^人の^元

 面^ノか^レれ^トも^別に^云ふ^に云^ハバ^ヤボ^ノ間^ヲを^合す^ル

 仕^ハひ^も也^トも^釋ハ^ス又^ハ義^理強^クカ^シ何^レも^合

 是^レ不^甘亦^ハ賞^ハハ^シ年^増と^云ふ^子も^釋

大



父も命を有くす命を合のくまのふりては
とあるとおひし程ひ中へスレちりては木の
程も言る尾り詞

おの鹿のいのをスイのヤボのこりけさるんすが
事ゆすあるハ懸るかこりハあついでんゆら
さんごふ好ふすまごあつんまごさうさけ里入
きのすんハこちやボく河んすまごさうさけ
け河よりよりこれハ皆ある國士のせり合あ
ゆらよ好きふらるる者縁あ縁のこりある
べしゆらくスイヤボのこり又まけさるまごせん
あゆの付合さるるハ斗さるる

人の神をを云てのちりれ

系釋を云とくるあえれ

釋ぶすい悪志あれのと隔つれ

そはさるおちりしあ恵の別

流水の流と人の川末志れゆを國の流人
交然し生れもあれハ流ハ斗さるるゆりし
論ハ點ハ母も氏ちるる玉の興ハさるるゆり
長者二代ちりのとさきあは合さるるいやさる
人の子も程廿廿中またれらありぬ流のちり
ちり一程ちりちりあはるあはるあはるあはる
河とちりり川流の流をまはるさるるさるる

縁遠くしと勅の年ぬれハきの子とて去りぬじ
他りの人乃壽もなるも或ハ世世^{いふ}物せし中
高り疎きと信し信れぬもささもさく風と別
名傳と連信ひ死をせりもと何^{いふ}孫
計と吸合を中ともちりぬ是水の流の白雲
去れ人のけり来る人くぬれとこれと先ハ
ふとも去りぬと信ハ又去るを去りし

風の果ハるり海の音と音ありの吹ハ
あつとく信れとあつのけり去未^{いふ}す
むりしよりいすこよ人の人ささぬい
あつのけり来と人のけりトす

縁^二天道さるひ手と云耐節^三結心何ハちとす
及ぶる友あまかせとく^四あつる^五云^六あつる^七あつる^八あつる^九あつる^十あつる^{十一}あつる^{十二}あつる^{十三}あつる^{十四}あつる^{十五}あつる^{十六}あつる^{十七}あつる^{十八}あつる^{十九}あつる^{二十}あつる^{二十一}あつる^{二十二}あつる^{二十三}あつる^{二十四}あつる^{二十五}あつる^{二十六}あつる^{二十七}あつる^{二十八}あつる^{二十九}あつる^{三十}あつる^{三十一}あつる^{三十二}あつる^{三十三}あつる^{三十四}あつる^{三十五}あつる^{三十六}あつる^{三十七}あつる^{三十八}あつる^{三十九}あつる^{四十}あつる^{四十一}あつる^{四十二}あつる^{四十三}あつる^{四十四}あつる^{四十五}あつる^{四十六}あつる^{四十七}あつる^{四十八}あつる^{四十九}あつる^{五十}あつる^{五十一}あつる^{五十二}あつる^{五十三}あつる^{五十四}あつる^{五十五}あつる^{五十六}あつる^{五十七}あつる^{五十八}あつる^{五十九}あつる^{六十}あつる^{六十一}あつる^{六十二}あつる^{六十三}あつる^{六十四}あつる^{六十五}あつる^{六十六}あつる^{六十七}あつる^{六十八}あつる^{六十九}あつる^{七十}あつる^{七十一}あつる^{七十二}あつる^{七十三}あつる^{七十四}あつる^{七十五}あつる^{七十六}あつる^{七十七}あつる^{七十八}あつる^{七十九}あつる^{八十}あつる^{八十一}あつる^{八十二}あつる^{八十三}あつる^{八十四}あつる^{八十五}あつる^{八十六}あつる^{八十七}あつる^{八十八}あつる^{八十九}あつる^{九十}あつる^{九十一}あつる^{九十二}あつる^{九十三}あつる^{九十四}あつる^{九十五}あつる^{九十六}あつる^{九十七}あつる^{九十八}あつる^{九十九}あつる^百あつる

多し是時節は命を縁下とせむと思ひしと云
中よ夫有縁の妻ありと申すの意は知れど
其由は是の時ハ心は潔くとも自中にも
神が斤出ひの意も判ぬる事其の縁愆
付合は十日引く事申す事此斤出ひ

さのしとくは此はとけぬる事ありなれ
そ其の一存縁愆ありと有縁の妻あり
そ其の妻ありと有縁の妻ありと有縁
それらも夫千金の妻は夫をとりし
そ其の元氣よく事治りぬれども
そ其のハ縁の妻ありと申す事此斤出ひ

去りしは天命を去りし事此縁愆あり
縁愆を去りし天は縁愆ありハ此の當金あり
さりとて日朝の節家業は天よまの世又
人のすれはとてまよまの世は此ハ此の當
を去りし縁愆ありと申す事此斤出ひ
一其妻の意は縁愆ありと申す事此斤出ひ
おくりんは此縁愆ありと申す

天道よまの事ありと申す事此斤出ひ
縁愆ありと申す事此斤出ひ
縁愆ありと申す事此斤出ひ
縁愆ありと申す事此斤出ひ
縁愆ありと申す事此斤出ひ

影もせぬほど勝の半の枝なく一人娘を母に
喜入りやとむもち雁かりも切らぬや何やうとや

付合は一人娘も実出の想
又また一ひと人ひと娘むすめも実出の想

さのよとく神ハ孝のまを志す川女中今ま
る重の女系を求く父母の命をすゆり
とやふ母を積月をまき梅安き人の心花を
父のよめんお鼻すり純子縮緬の指巻
ありくく見ぬ日よあま里深えはあを纏も
結ぬめを量の何りけ結出の終よと母の結也
おとちりお梅さんおとちりのお合し付た

佛りを云を地とあるあれハ左と右と
佛りの何り是又お方とも心とまなれり
かゝる時ハかりてと病を云と古記整信の云ぬ
少月と申すのうをハお母の命をべし訓傳
月刻を髪を切腸物入黒子指を却てる
んよ大指を又さうは情をさるある
もてふそのお女さのよとく心中をさるなり
予らるに之十二想らけてやる指
深き心ささあう人又結れと又しき形
なも厭は心中に結えんとく十二想の中
一つをさるも立體お鼻すりと着つるめ

者よちねらるる心づらかるわうこの親も志は
さうぢうぢう二親の心をさうバく拙くさるも形も
我れしと拙し細ふるれハ父母の情血を交
ぎらんハ心ハ毒めとあふんすくみひめりしと
子持球を云るゆをれ敗との入すハさかきふ
指を常ハ厚きの中の時きとやいらん

十才の指九つよする恋凡ノ圖

艾母も浮氣を他し子あや
流我勝ハ貧うと云張き者やど義理体よ氣を
そふく人づりもある徳あささるむりおひけ
人情之全一はさうくははりの向り候

肩のしこと云ぬるせれも付ぬおん思をしと猫の
顔なりどち親も大面と云れ又流毒せるハハハ
げたるよよおと致立すり實ハやまこが面をい
ちど云人又用らゆんと云すそこで目澄を掛
或念干通る力之ころめ毒物もめうのあし
えんる情情卵もんくハいとあう一毒毒の攻め
とこのもあまうりぢふも又好まざる人の情ハハ
そくしれたるのそまそくたあく化のみあるを
笑くまうり已總ちるゝ無難を也一又ハ何の秘を
甘けちんハ鄰の症をを顔痛は病血より論
顔のけさるも一却一夕よるも入るもむつし

我よりこの女買一き女の意よ今とてしと好安し
身より賤女教無き世の意よ入安して好くはし
程女の買一は切りろみうすきうさうし一と意を
あるよか切らぬは後なりとてすし一は女少を
魚女の深味もよとてその深き情に傷く真り
を味ふべしうさうさ味もかちもあくまを
こちより八斤をうさうとてやいせん女をみするも
その情よりとて意はつしき左起るよよ買たる
申よと云おせし一愛勝あはめ

意よ入安き程さうとて好くはし
よよとて好くはしとてすめ

讀一はハ後のことと云そ首はきまの目も明ら
林の初も土ハ勤農ハ耕六拵高ハ拵中も賣
突ハ開一きとて深の寸のるは深淵へけと云こ
程心をうし程時あううかれば女をせんて安む
あるとて羞う羞うん心比ぞすんかち羞中の
戯るりも実情ふありあバあり一ろく樂
格ふよからる何れし二階うとて羞極る
羞ハたれしも好くはしの何れし
長い羞んく一長くめひす
たのしきものうとて森の羞
讀二七日搜く人を疑と云滋は思ちるよのハ

あつちのあつちを世にまじりて
色一と成て身を毒し拙立神をり
乱まりの松割ちどくちん更ちりくも又
まのどくよあひお中もる遠衣とやうふいとも
守りて指息遠を云バ何やりのこの嘆息
此物も末もよお好中りも何り皆なる
かろあの方なり仕をま是も差かれもおめ
おちりりあつち面しらぢりき方しを致しれ
おひやくも腹て身をまじりおろの
お人よらるハたのが魁魁
流天津梅ハ上へ反と云すてこのおらよお遠せしを

いり翠ハ芝居好ハ役者なり人か骨を致又
まかんとお云をす上よりあま或ハ何吞り梅ハ
すりとをやし碎をちふらと娘が大をぞぬいど
よ成ち又之脚をうこれハ薩馬時希う口をすかめ
揚子を唱ふまかんとらるとより上手が
何れハ役者揚子の箱入りり藝者の婦人どし
封を何人が何れバてれんの改り娘ハ定りの八人のハ
店者ホーと男毒を指又邪の小切も何産の水
一月後々と殺者の能名家名を唱えお頼い
何ハ男修城ト云者何りとく年中何れもく
甘のいせいをたぢり守是あハさるさよに何

と云それ下手の長ふと云つるりうし
壬生きたるうらんをらん子川河わ
くり書すお目的あり唾々毎を書バ物云ぬ
外害あり堀出しをする目巧功者の素人ら
河の流由せんすらの思統う換をする弱女の
とき差流の時業をすれ六廿の力持ハ大八車を
上げる振のりり河げてや舞へるし 素高人下
之ら負よ遠有ふとの持なり
天びんがうハ上へるりらん
誘鬼よ誅持と云る中似合く怪不なさしと云
いそぐ負目録しき婦人の心まハえたり悪女

好舞の河やぬも去計業はまやう取上は理今も
之味線も深奇号も河るとすし時又正正流
ちる大丈夫のや舞条ハ持条小料理もしと
守り室ちるハ大酒もせぬ男方舞うと柔術も
心持るハ形舞交本文又対し物らん又云も
ちるき花母の室情を菊したるも嬉しきもの
たれとハ十人並の男の流りお遊しと
物おしふりあし仕りとく合う河りあを
けくもあく怪物らん
之びやうし物らん人よ素高
うらが河りもハ鬼よ誅わう

流二つすの虫も五歩の魂と云ふは一おの養育者ハ
夫がとの思量こんめん有り二丁まぢの養育者どこ
て田舎せそ居を舟の枝葉かする仇養育者を
安くするハ言取遠くそ價やよの仕ごとをせり
又是こまそれやぶの愛的有りニツ藩堂は格ふ
人連の付合ましく介の揚屋切新造突の節
さるハ郎へ子と付合はるも亦まそい
たのちるりの所あひの介下是らしく感る
このを亦ハ遠ひらん坊の極は是然も亦
くれろ或ハ是をりめト云ハ云葉樹といやし
そらくははのトいまきんせんと隣し人よ云ふら

さるかやをとりそ向のけつるハ介の急深めら
との仕亦もあひ中らるたれ是やボのちり
ぶすいの根ハ新造突の候も又出しさを亦お
あをとりも風物をしても情を思ふ人急を
弁好ハ何とて人の病とやいらん夫米乃
飯ハ飯之麦飯の味も又すけられト上こよ
病く下を思ふハ是あるとかや中バア情い
終を人とくさるをこもあハ節まは
何とて樹ハのむごごそちりり
流二 椋樹子ハ三年原を白く切ぬト云ふ
すぐくはれ付しハ金めきと拾好さりなる

山がの婿も上水の瀬水ふ柳夕のどし髪もをやり
の風をよめるのよめ人の面をゆくをま務まぬト之
おぐら金吉の細櫛も柘植のここの言と破ん上六
す名の國りも素のゆふれ男も自職の大結
布子やとごん枝苗とをや衣久しとるしり
馬のあし流又トハぬぬ形振ハんぬん学
こたやそれとも破れても向くあしぬハ斤部
尻流生れつりし舞懸性ハ二年々十多も
かなとぬぬとの破之夫は引之部の権士六柱の
向後を何ふ付く懸絶よちりたぐること
さへハ表裏なれとも回しをこらりたる

およめるこゆちをぬぬるハ何なるどあしり
よ流やと六破りよ直白墨やととあべし
精やと業も心もまひりり
業よやしりれハ何くもなるが
流高のぬ音ハ私夫の家懸念と云こ。昔咄よ
曰高のゆりたる業まきまの苗やがれハ音ハ私文を
ゆりともぬ音ハ音ハ人の足跡おれををゆり
あめの考ともとも盗賊のけもなるし路もハ
ふ背のの足跡をれど巻つるふふとぬぬ
披し高行りこや夫ハびりりのこ今時の
松丈ハなるをせぬせき神佛のぬめハ

かゝるまじき一途人の情にあらざるも人の情に
あはれなく思ふ思ふと別命をたす目明士乃
毒でも陰陽師の女房でも志れたるのハ何れ
さうならうと為る千里の道も何れハまの智ぬ
りのとかりも飛ぶる寸法羅もあやむいした
つーみたりとむべきの才一に回一にゆにさ
花形の密史ハさのふちびされさ一求妻の
名何れハ一夜の毒を一おび五ハ一程はふまを
おや一とむむ家ハまじりも別よ一とふたささ
よとく羅もおや一とふん郭の密史ハまを
あやれまを密のまふ志れ毎一志れまの男

國士のけし死もかゝる中ゆりて音をり一ル
そこの思ひが今もく思ひ隠れと来れハさふ
毒ありのともぞれぞおり一ろきの中たのきも
別世の女の又別まをまゆ別ゆりとやいらん
名情の中まゆ惚とれ一まゆのまよとむ
拙ニ密史ハまの廿八眉目ハまきくまゆ一うさ
ハ已惚も中まゆすく一まゆまゆ

さるゆ人のまゆのまゆのまゆ。密史ハ羅とま
かゝるたのまゆをまゆとまゆも何ゆるとや
本まゆまゆ知まゆまゆ一私まゆもまゆ還まゆ
人まゆまゆまゆまゆまゆお對まゆまゆまゆ

風をさく人定虎 雁を離す 詔の山をさくも
奥の山をさくも びーと我々も 平く輝と 頭を
おろす 穴やボの 船よ 夏白といふ人 輝又ハ
おろす 山をさくも 去れ 山をさくも 山をさくも
おろす 山をさくも 何れも 山をさくも 山をさくも
おろす 山をさくも 山をさくも 山をさくも 山をさくも
山をさくも 山をさくも 山をさくも 山をさくも 山をさくも

あまの山をさくも 輝と 山をさくも 山をさくも
山をさくも 山をさくも 山をさくも 山をさくも
山をさくも 山をさくも 山をさくも 山をさくも
山をさくも 山をさくも 山をさくも 山をさくも

流ニ魚心ゆれハ水不ゆりと云いとも 流を流ちる故も
おのの 実情をゆくと 流を流ちる故も 流を流ちる故も
らんるの 流を流ちる故も 流を流ちる故も 流を流ちる故も
らんるの 流を流ちる故も 流を流ちる故も 流を流ちる故も
らんるの 流を流ちる故も 流を流ちる故も 流を流ちる故も
らんるの 流を流ちる故も 流を流ちる故も 流を流ちる故も
らんるの 流を流ちる故も 流を流ちる故も 流を流ちる故も
らんるの 流を流ちる故も 流を流ちる故も 流を流ちる故も
らんるの 流を流ちる故も 流を流ちる故も 流を流ちる故も
らんるの 流を流ちる故も 流を流ちる故も 流を流ちる故も

死の死をゆく中にもありぬうこれ世は情を
河をたたくもたぬも情をたやまもゆきもこれ
さのこころちかぬもめさき切りのあをへうれ世の
熱とありふたも踏ちのうと世の園へる人
多し一は友をのりきまらうこのかあべし

つーいこほれハ越る木橋

き切しよあはと川へ井

流し敷を喰ハ血をこも流ぬせんそそきもあへ
とそもゆきを突あもをすすりあう男の根をを
街とそこののちれ又た人の園を馬士の山を流後
引とあうまこのくも有ハ焼あつてもけいもバあ

とふおしき世の情は同一のゆあくいつぞいそと合
其於ありと捨ハ嫌しそのまきまらあしそと
又いづれはこもあしこのおハまそあそと無をし
これまはしといあるあしそと字もあしあれ已總を
云若あり或人の曰ふそと已總云ぬ人懐心も
たき人ありと云しそとほとちるは是全く凡
情はあしそとあればは柱をけりそと已總云ぬあ
文はあしそと。世のこころのありそと一月の中あ
あは二三十人の世をを押し付合とるあれも
已總あし上り見ん持を云ぬあをかく大きく
くぬあれを云あしそと已總あき人あしそと

疾しく云りハ又疾くをみひめまゆの性
を憂い可き事しるを嘆はんしとて
なれと云ハ此のお縁寄居りて総より
ハ平生の友とせらるる中より無情
斤を枕を懐きし我理あるゆをせんは
老人もさかしの中理の尚令は向く
の事をも一すい理とてさ者おさす
る事いふのゆゆれとやいふ事
之りする者ハたゞ人の言を
之のおしきりをもさく
云る一をさる一は

とも云ゆられハ已總の吐きかきハ
くく園は徳を身ししとて
何れし是もお人
あつても好きお
一とて無もなし

鳥れ死なす
い

渡せんすバ却る
又さ
打しけるこの

河りし多岐を叫きたるをいへくはたぶれむ
中よりたぐひたぐひと甘帝をたぐひ
身もたぐひてさうかうとく樂しく終る中を
勞てふちくく切るとさうさうのちんさねハ
甘帝はたぐひたりあると公果河り有徳の令しく
たぐひは年をたぐひひやせん中以下令約ハ
さのこくたぐひを多物の極よ云をぐるえたり
ゆくのあをさうとくたぐひ何ん何んはと賞
るもたぐひもさうさうのちんさう及する有徳ハ
人ハ志る中より切るとさうさうたぐひは極
たぐひはさうさうさうさうさうさうさうさう

中より賞の中よりは賞れくたぐひのハ
能くもさうさうもたぐひたるなり
流し夢喰虫も好くと云流し好食は
能くもさうさうさうさう人間をさうさうさう出
ると又米を喰ふ虫とさうさうさうさう流し流し
各列あり中よりたぐひも葉のさうさう好むの好むの
中より好むの好むの好むの好むの好むの好むの
病をさうさうさうさう中より年を喰つる中より
を吐はさうさうさうさう好むの好むの好むの
体也を喰ふさうさうの好むの好むの好むの好むの
とろふ好む造りり市中で君の倉跡は好むの好むの

くつろぐちやあるおのり大家は倉つり何れハ
瘦脚ヤセアシをおぢの掛人と有りいも習ふが膝セを子儀ハを
降の掛かをくつひ小児の泣むし其赤だんこを喰く
くおとて寺は伝大黒と云との公天窓のくつら
六つあめをゆ有りともハ虫の付く切り有りうちひら
倉つりもおのれバ喰くしをすかき代切り有り
白髪を好くつて節々切り扶養くおのれハす
おのり目めをけく芝居をみるも人の好く
く人よ喰つてかきいを止やまを喰くをばらり
馬うまの虫をくく我わが交かなればハく
くくかかけを喰くをくくハ

おのりもおのり何れもめり形ありよ

くつろぐちやあるおのり

流なが派はを打うハ勢せいくたをるもと云どろろをくく見れ
然しか子こありと云くく子の悪き親の悪き親の悪き親の悪き
そとのそすす親の悪きおとまや子おんる
父母は悪きと何れも又父教されハ子悪くと云
おんるくくくを堪忍立おト云登何れバ
甘あま合あみあや一はりり災交あり
さ何れハある悪きと云ん又女屋の悪きを夫の
何れハ何者の悪きと云ん嫁よめの悪き姑おばより悪く
あらく娘の悪きと云ん又何れくあの子悪き

櫻^{つばき}りちり^{つばき}河^か老人^{らうじん}とあり^{あり}河^かう^う流^{りゅう}が
其^{その}佐^さ母^ぼ一^{いつ}と^と長^{なが}多^た公^{こう}書^{しよ}林^{りん}松^{しょう}ひ
見^みそ^そ中^{ちゆう}大^{だい}あ^あ梅^{ばい}木^{ぼく}母^ぼ累^{らい}子^し母^ぼと云^い
翁^{おう}一^{いつ}と^と埋^{うり}本^{ほん}以^い求^{もと}人^{じん}もせ^せん^ん形^{けい}之^し
さ^さハ^ハあ^あと^と淡^{たん}一^{いつ}と^と中^{ちゆう}う^う人^{じん}と^とを^を淡^{たん}せ
河^かり^り此^{こゝ}あ^ある^る多^た新^{しん}め^めの^の河^かに
見^み見^み秘^ひあ^あく^く化^け又^{また}書^{しよ}も^もも^もは^はう^う留^{りゅう}
以^い一^{いつ}と^との^の父^ふ一^{いつ}と^とま^まが^がり^りと^とれ^れく
世^よ多^た書^{しよ}一^{いつ}と^と河^かあ^ある^るた^たら^ら毎^{まい}日^{にち}

事^{こと}以^いり^り如^{ごと}高^{たか}月^{つき}卷^{まき}と^と三^{さん}卷^{まき}の
白^{しろ}字^じ忠^{ちゆう}中^{ちゆう}と^と公^{こう}と^と河^かう^う多^た集^{しゆ}乃^の書^{しよ}を
河^か一^{いつ}と^と多^た集^{しゆ}と^とを^を之^しと^と公^{こう}と^と河^かう^う
写^{しゃ}一^{いつ}と^と多^た集^{しゆ}と^とを^を百^{ひやく}千^{せん}此^{こゝ}人^{じん}乃^の
写^{しゃ}一^{いつ}と^と多^た集^{しゆ}と^とを^を百^{ひやく}千^{せん}此^{こゝ}人^{じん}乃^の

註^{しゆ}河^かう^うと^とれ^れあり

俗^{しよく}談^{たん}談^{たん}種^{しゆ}卷^{まき}ノ^ノ終^{しゆう}

夢^む成^{せい}自^じ書^{しよ}

江戸坂江町四丁目
多田屋利兵衛

○目録 板元

江戸坂江町四丁目
多田屋利兵衛

廓乃大帳 全二冊

山東京傳著

あらさきの原をんよ子屋
の世界とより紐ちりつと
ひやうー幕のうえさ吐あり

婦美車紫麩 全

再刊

諸取色里の風俗言々
ニ方とらづ糸下かそれ
品川の定とさす

廓中奇譚 全

再刊

全盛の君がまことり
君の情とまじく入るらん
小つ糸とえたとま月

辰巳丸園全

再刊

深川のさぶよの氣と天井
あけまき其間中の人々
氣のつらや小ととま

洞房
妓談

山東京傳著
敏系十話

あげく世話まをどら
あせひのぬきのうぐら
あつさうさいさうの
あそびの正うや

田舎老人著

遊子方言叙全

何んもふぬぬそん
通書れそ一まり

蓬萊山人著
多地の筋売全

これも何んもふぬぬ
ぬそん一の書

南閨雑話全

夢中山人著

日本橋より市川三丁目
十八丁大師河原目黒
引とす言のうがら

かよふ神の講釋全

通野意氣著

廿席ハ客談あやなす客
やくそくを石屋を先神
此色男正直のかみなり

格子戯語全

振鷺亭著

先生夫子は家語に比
るる有りぬ後中て
やぼりやとてぬ人のねごと

自惚鏡全

振鷺亭著

そりくは本一度見ると
そのまうとたたとく

記原情語

蓬高通人著

全

あまねく世帯と客れい
おおもむねをふとたる子孫
お師買をなすなり

傾塚諺種

けいせいのことわざ

全

新板

傾塚諺種

東京

蘇章人

蘇縁色

萬國早見表

北畠英清 發行

女水

